

『西南学院史紀要』 発刊に向けて — 抱負を語る —

【出席者】 伊原 幹治（百年史編纂諮問委員会委員、高等学校教頭）
 小林 洋一（百年史編纂諮問委員会委員、神学部長）
 塩野 和夫（百年史編纂諮問委員会委員長、国際文化学部教授）
 寺園 喜基（院長、神学部教授）
 司会 高松 千博（前企画広報課長）

司会 本日は、「西南学院史紀要発刊に向けて抱負を語る」というテーマで、座談会を開催させていただきます。今日ご出席のみなさんは、院長の諮問機関としての百年史編纂諮問委員会の委員であり、「西南学院史紀要」創刊号の発刊を担当していただいているメンバーです。委員のみなさんの他に寺園院長にも出席していただきました。

まず最初に、みなさんの西南学院との関わり、キリスト教教育との関わりといったことについてお話ししたいと思います。

小林 私は1965年に西南学院大学の神学部の3年次に編入してきたのが、西南との最初の出会いです。専攻科も含めると都合3年間、かつて神学部のありました干隈校舎で勉強しました。その頃は半分位は宣教師の先生でした。C. K. ドージャー先生の子息である E. B. ドージャー先生が現役で伝道学と説教を教えていました。授業中に居眠りしている学生がいて、窓のところにツカツカと行って窓をガーッと開けて風を入れるんです（笑い）。それは非常に印象に残っています。すごく素敵なジェントルマンでした。1986年に教

員として西南の神学部に赴任してきたわけですけど、干隈は学生の頃は、ほんとに山の中という感じだったのですが、周囲は住宅がびっしりでその変わりようには驚きました。

寺園 私も神学部卒ですが、小林先生よりちょっと早いです。高校を卒業してすぐ入りました。62期卒です。その後、九州大学の大学院に行き、留学し、帰国後は九大に勤務して、1998年に神学部の教員として戻ってきました。私は西南学院の建学の精神に引かれて就職したという意識が強いんです。西南学院がキリストに従うということがなくなったらもぬけの殻になってしまうと私は思います。キリスト教に反対の人や無関心な人ももちろんいるわけですけど、やはりキリストの福音の上で西南学院は動いているということをいろんな場面で覚えますね。

小林 寺園先生が神学部に入られた頃は高卒の人も入られたのですが、私の頃は高卒しか入ることができなかったんですよね。もちろん西南聖書学院が付設されており、そこには高卒の方が入学できました。

寺園 でも私の時も高卒は私一人で、卒

業するまでずっと私は一番年下だった記憶があります（笑い）。



小林 ある意味で特殊な学部だったと言えます。当時、なぜ高卒の人が入れなかったのかというようなことも検証しておくべきでしょうね。

司会 それでは塩野先生お願いします。

塩野 私にとってキリスト教教育とは何かというと、自分が教えられ育てられたことによって次の世代を教え育てるという、そのように考えています。私は同志社に行きましたけど、小さい頃から同志社香里という学校を作るために私財を投げ打った人から「新島先生の教育精神によって毎日授業が行なわれている、こんなにうれしいことはない」と聞かされて育ったんでね。その学校に入学して、いろんな人の教えを受けたりお世話になって育てられた。中学、高校と同志社でキリスト教教育という他に換え難い教えを受けた。それは、その後の人生にとっても意味のあることでした。高校3年生の卒業式の数日前に、校長先生が私をわざわざ校長室に招いてくださって「私の志、キリスト教教育にかける私の志をぜひ塩野君に受け継いでほしい」と委託されました。そのことを忘れていたのですが、ある大学の非常勤講師を担当して、学生の成長する現実と接して思い出したんです。そんな時に西南学院大学の教員公募があって、迷わず応募しました。繰り返しになりますが、キリ

スト教教育を通して自分が育てられたことを、次の世代に引き継いでいくということが大切だと考えます。

司会 塩野先生は、中・高・大と同志社に行かれたわけですね。

塩野 そうです。



伊原 私は1965年に西南学院高校に入学したわけですが、それがキリスト教との最初の出会いです。それまではキリスト教とは全く縁のない人間でした。私の場合、隣の修猷館高校を見事に落ちて、私の友人はみんな修猷館に行ってしまう・・・（笑い）。私の中で「西南学院高校は来るべき学校ではなかった」という気持ちが、高校を卒業するまでずっとありました。でも、卒業して2年後には信仰告白をして教会に導かれているわけです。西南に来てキリスト教に出会ったということが自分の人生を決めてしまった、自分の人生からそのことを取ってしまったら何も残らない、そういう意味で、私の人生の原点が西南学院高校でのキリスト教教育との出会いにあったと言えます。その時は分からなかったのですけど。

大学に入って感じたことなんですけど、西南学院高校から来た学生は他の高校から来た学生と比べると何か違った感性を持っていることに気付いたんです。自分自身の中にもそれがある。そういったことは西南学院高校を卒業する時は分からなかったのですが、卒業してからじわじわと分かってきました

たね。

小林 伊原先生の言われた「大学に入っ
て感じた西南学院高校からの学生は違
う」という点を具体的にもう少し話し
てください。

伊原 自分が教会に通っていたこともあ
るかも知れないけれど、例えば、「い
のち」とか「仕える」というような事
柄に対する感覚が違う。「する・しな
い」は別としても、くどくどと説明し
ないでもわかってもらえるところがあ
ると思うのです。他の人にはどうして
そういう感覚がわからないのか違和感
を感じたことが何度かありました。



小林 伊原先生の話聞いていて、私が
なぜ西南の神学部を受験したかをお話
しするのを忘れていたことに気がしま
したので（笑い）少し話させていた
きます。当時、私は東京に住んでい
て牧師になろうという決心をしていた
のです。私がいた教会の牧師も西南の
神学部出身だったのですが、その人か
ら「今、福岡からドージャーという宣
教師が来ているから会いなさい」と言
われたのです。その時に、ドージャー
先生から「ぜひ西南学院を受験して
ください」と勧められました。その時
の笑顔のドージャー先生の印象がす
ごく残っています。それが、西南との
出会いのきっかけです。

■西南学院と建学の精神

司会 次に西南学院で教鞭をとられたり、
役職の仕事がされたりする中で、建
学の精神の視点から印象に残ってい
ることがありましたらお話しいた
きたいと思います。

伊原 1994年に西南学院高校は男女共
学に移行しましたが、そのことを検
討する時に職員会議で男女共学委員
会を作ることになりました。共学に
するか否かというような重要なこと
が、私も含めて5人の委員会だった
と思うのですが、そこでいろいろ調
査し、そのことが職員会議で審議
され、承認され、最終的に理事会
で承認され、学校が大きく変わっ
ていった。そういったことができる
ということは、いかにも西南らし
いと思いますね。その時に、共学
化の第一の理由として掲げたのは、
「建学の精神を行うために必要」と
いうことだったのです。第一の理
由は少子化対策じゃないの？と思
われるでしょうけど、そうではな
かった。建学の精神というのは、
普段はあまり表に出てこないとい
うか隅に置かれているのですが、
何か大きな転換期などのときには
説得力を持つ、長く続いた男子校
の伝統をも覆すような大きな力
を持っている。やはり、西南では
建学の精神はずたれていない、い
い学校だと思えます。それが、西
南で働く自信にもなっています。

塩野 私はキリスト教を教えています。
キリスト教はI、IIと必修で、その
展開としてキリスト教人間学A、B
があります。私は人間学Bで西南
学院の教育精神史について四学期
ほど教えたことがあります。各時
期に西南学院はどのような状況
だったのか、その時

期の教育を担ったのはどういう先生で、その人たちが授業で語っていた内容を学生に紹介したり、一緒に語り合ったりしながら講義を進めていきました。そこで感じたのは、堅実なキリスト教に基づく教育がなされていた、地道だけど非常に堅実なんです。同志社で受けたものとは又違ったキリスト教教育の側面に触れることができました。でも、もっと大切なことは、学生がみんな一生懸命聞いてくれる、考えてくれるのです。学生にすれば、今、自分達がいる西南学院っていったい何なのだろうという関心をもって学ぶことができてよかったのでしょうか。学院史編纂という目標をもつ研究会に参加させていただいて西南学院の歴史をもっと発掘し、いろいろな事実を知ることができる。それは私自身にとってだけでなく、西南学院に関係する多くの人たちにとって大きな意味があることを、学生達が教えてくれました。それは大きな喜びです。

司会 寺園先生は院長ですけど、今も神学部で教えておられますね。

寺園 私は1998年に西南の専任教員になるまでは、1973年からずっと非常勤で教えていました。1980年代までは学生に厳しく対応しても手ごたえがあったような気がしますけど、学生気質も変わってきたなという気がしています。私自身もちよっと甘くなったかも知れませんが、建学の精神とかキリスト教と言うと甘えの原理になりがちな部分もありますけど、逆にそれをバネにして、そこから頑張るというのが出てく

るといいなと思います。私が専任になって感じるのはチャペルアワーの重要性です。私がまだ学生の頃、河野博範先生が「チャペルの講話に当たった瞬間から、どんな話しをしようか、学生にどう伝わるだろうか、と心配で体がガクガク震える」という話しをされていたのですが、その時は、へー、そんなものなのかな、といったくらいしか考えていなかったのです。でも実際に自分がその立場になるとその言葉が本当だということを感じて分りました。そんなチャペルアワーをもっと大切にして欲しいと思います。内村鑑三の『余は如何にして基督信徒となりし乎』を読むと、アマスト大学のチャペルアワーでシーリー総長が非常に感銘深い話しをしているにもかかわらず、学生達が居眠りをしている、と書いています。チャペルアワーというのは短い時間ですけど、本当に貴重なものなんだと受け取ってもらいたいですね。

小林 私は、印象に強く残っている出来事をひとつだけ言わせていただきたいのです。それは、1989年（2月24日）の天皇葬儀の時に、国民の休日となったのです。神学部で休日にするかどうか



かということで教授会で喧々諤々議論を行なったのですが、なかなか結論が出ない。ところが学生の方はいち早く休日にすべきではないということを決めたのです。結局、休日にしないという意味で神学部としては自主講義をするということになったわけです。そこで、講義をしない人と講義をする人が出たわけですが、その日はマスコミがわんさと神学部にやってきました。1日、ごった返しました。夜、干隈の研究室にいた時も抗議電話が何件か、かかってきたのを覚えています。あの時はいろんな意味で、試練の時でした。キリスト教学校の姿勢が問われた時だったと言えると思います。そういったことは今後も起こり得ることなので、できればこの紀要で研究を深めて検証をしていく必要があると思います。余談ですが、マスコミで神学部の対応が報じられた後、右翼の街宣車が干隈校地でなく西新校地にやって来て、何人かの先生から冗談交じりで「あなた方のために大変迷惑しましたよ」と言われました（笑い）。



■百年史編纂委員会への抱負

司会 次に、この諮問委員会は10月に答申を出して、その後は100年史編纂委員会に移行することになります。この委員会の先生方も多分新しい委員会の構成員になられると思いますが、その

委員会に期待すること、抱負をお願いしたいと思います。

寺園 二つあるんです。一つは、私たちが常識と思っている西南学院の歴史とか事柄を問い直すというのが大事だと思うのです。例えばドージャー先生が言ったという「Seinan, Be true to Christ」の日本語訳ですけど、「西南よ、キリスト教に忠実なれ」となっています。学院ではその訳を一般的に使っていますね。でも1934年に発行された『ドージャー院長の面影』の見開きのところには「西南よ、キリストに真実なれ」という訳が掲載してある。私はそれを見て、今、忠実という言葉を使っているけれども、どのようにして決まったのだろうか？ どこかで議論して決まったのだろうか？ どちらがドージャー先生の気持ちに近いのだろうか？ そういったことを考えるのです。日曜日問題も含めて西南学院の歴史に関して常識的に言われていることをもう一度きちんと検証する必要があるのではないか、検証の結果、意外と客観的な事実ではなかったといったことが出てくるかもしれません。それが一つ目の期待です。

もうひとつは、西南学院の歴史を考える時に、内部で自己完結的に見るのではなく、当時のキリスト教の歴史のコンテキストや我が国の歴史、教育史のコンテキストの中で見るのが大事だと思います。例えば1959年に出版された『日本バプテスト連盟史』を読むと、西南学院創立前のことが書かれています。西南学院を創立するに当たっては、いろいろな人の尽力があったわけです。要するに、西南学院の中で今、完結されている歴史理解というものをもう少し広いコンテキストの中で検証すると、

もっと興味深い事実が浮かび上がって来るのではないかと思うのです。それが二つ目の期待です。

塩野 私は歴史研究をしています。歴史研究というのは地道で忍耐のいる仕事です。しかし、研究を進める中で、歴史との出会いとか発見といったものが多くあります。特に精神性が深く刻まれているもの、祈りを込め、打ち込んで、忍耐してやってきたものにはいっぱい宝物がある。心を揺さぶられるものがある。西南学院は歴史の中にそういう宝物をたくさん持っているにもかかわらず、そのことに十分思いを向けてこなかったのではないかと、それらを十分に発掘してこなかったのではないかと思うのです。いっぱいある宝物を、学院史編纂のための共同研究で発掘していくことによって西南学院自身が覚醒されることにつながる。その覚醒が次の時代を西南学院が生きていくための糧になると私は信じます。そういった共同研究には魅力がありますし、それに参加できることは名誉なことだと思っています。

伊原 こういう言い方で良いのかどうかは分かりませんが、先年、南部バプテスト連盟から西南学院に派遣された宣教師の先生方が連盟と縁を切ってしまうということがありました。ドージャー先生はその南部バプテスト連盟から派遣された宣教師ですが、今、西南学院には南部バプテストの宣教師は一人もいないこととなります。私は高校で教頭という立場から営業をやらなはいけないのですが（笑い）、創立者と同じ南部バプテスト連盟と縁を切ってしまい、今や宣教師が今一人もいないというのは非常に残念ですね。

ドージャー先生については、いろいろな冊子や本で紹介されたり、チャペルのときにドージャー先生を知っていた人から話を聞いたりして、ドージャー先生とはこういう人だったんだという一種の「偶像」みたいなものができあがってしまっているような気がします。西南学院も創立からこれだけ時間が経ったわけですから、ドージャー先生もそういう「偶像」からそろそろ解放してあげていいような気がするのです。塩野先生が話されたように、これまでの歴史を検証し、新たにいろんなものを発掘していくとドージャー先生のもっと違った部分、実像がいっぱい出てくるのではないかと思います。ドージャー先生のことだけでなく、例えば戦時中の西南学院のこともそうです。西南学院もやがて100年を迎えるわけですが、私たちがこの歴史研究を行なって行く中で、新たな発掘を行っていくことで、西南学院の今後の方向付けに寄与できるかも知れない、そういう期待も持っています。

小林 今、学校の点検評価が言われていますけど、この歴史研究の成果が西南学院の教育の自己点検の大きな要素になればいいなと思います。西南学院ではキリスト教教育というものを建学の精神に基づいて、あるいは建学の精神を標榜してやってきたわけですが、それは一体何なのかということです。それは歴史的にちゃんと後付けしないと抽象論になってしまうわけです。それから、教育の歴史にも必ず光の部分と影の部分があるわけですが、光の部分は出やすいのですが、影の部分は出にくいですね。特に私が思っているのは、伊原先生も触れられましたが、戦時下

における西南学院のキリスト教教育とはどういうものだったのかということをもっと掘り下げて検証する必要があると思うのです。明治学院ではそういった動きがなされましたね^(注)。これからの学院史の研究というのは、自己点検評価の記録となる、そういう点で私は非常に期待しています。

もう一つあるのですが、これから学院史の研究がなされていったら、近い将来、キリスト教の関連科目として「西南学院史」という2単位ほどの科目が設けられて、受講した学生達が、西南は素晴らしい、西南が大好き、という気持ちを持って卒業していけるようになったらいいなと思います。そういう意味で、西南学院の資料研究が活発になっていくことを期待しています。気になっているのは西南学院においてキリスト者が多くないことです。でも私はキリスト者でなければキリスト教教育はできないとは思わない。でも、そのあたりをどのように捉えていくか、どう評価していくかということも今後の研究の中で深められたらいいなと思っています。

司会 私はクリスチャンではないのですが、チャペルアワーで講話を担当したことがあります。「卒業生からのメッセージ」という週テーマでしたけど、私なりにキリスト教から得たことを話させていただきました。チャペルアワーの時間に私のようなノンクリスチャンに話をさせてくれる西南って、懐が深いというか広いというか(笑)、いい学校だなと思ったことを記憶しています。

塩野 具体的な西南学院100年史の編纂作業は一年後からになるわけですが、その時はこのメンバーよりもかなり多

い構成員になると思います。今日、私たちが語り合った学院史研究がもつ興味をぜひ理解していただいて、共にやっていただきたいと強く願います。

寺園 普通の会社の社史なんかであれば、資料に基づいてゴーストライターが我が社はこんなに歴史がある素晴らしい会社でこんなに栄えているといったことを書いて、どこかおぎなりにやるんでしょうけどそれではダメです。西南学院はひとつの理念の上に創られました。過去を誠実に振り返り、その結果を将来の指針にしていくという、そういう作業にできるだけ多くの人に関わっていただいて、作り上げていくことが大切だと思います。

■夢の実現に向けて

司会 最後に当委員会の委員長である塩野教授にひとことお願いして、この座談会を終わりたいと思います。



塩野 百年史編纂諮問委員会で仕事をすることになって、初めて学院史資料の整理状況を見たわけですが、ほとんど整理がなされていないというのが現状です。やはり、まずは人の手当をきちんとすることが必要だと思います。片手間でできない。そのことをぜひ学院にお願いしたいと思います。膨大な資料の整理、保管がきちんとなされなければ、学院史研究の成果は期待できません。私たちが今日、ここで語り合っ

た夢を実現するためにもぜひお願いしたいことです。今日は、みなさん、ありがとうございました。

(注)『未来への記憶：こくはく敗戦50年・明治学院の自己検証／明治学院敗戦50周年事業委員会』（ヨルダン社、1995）参照。

■この座談会は、2006(平成18)年1月6日に実施しました。